

面接試験に対して受験生が抱く印象に関する検討

— 調査大学間の比較を中心に —

西郡大 (佐賀大学アドミッションセンター) ¹⁾,
倉元直樹 (東北大学高等教育開発推進センター)

本研究では3つの大学における面接試験の受験生を対象に、実際に彼らが受験した面接試験に対して抱く印象を調査した。先行して同調査データを分析した西郡(2009)で示した面接試験の印象を形成する心理的メカニズムのモデルを踏まえ、各要因の調査大学間の比較を行ったところ、「社会的要因肯定的認知度」に特徴的な傾向を持つ大学では、同要因によって、面接試験の全体的な印象が左右される傾向がみられた。また、面接試験のウェイト認識や準備量によって、受験生が実際に受験した面接試験に抱く印象に差が生じる可能性も示唆された。

1. はじめに

わが国における大学等進学率は、55.3%(文部科学省,2008)となり、大学を選ばなければ、志望者全員が大学に入学できるという「大学全入時代」という言葉が現実的なものとなった。定員割れを懸念する大学はもちろん、従来は、学生獲得に関して、悠長に構えていた大学でさえも、大学経営のために、志願者を集めることが見過ごせないミッションとなっている。つまり、ほとんどの大学が、深難度の大小こそあれ、熾烈な競争に晒されているのである。

こうした背景を踏まえたとき、入試そのものが、志願者獲得に関して大きな役割を果たしていることが考えられる。というのも、多くの受験生を惹きつけることのできる選抜方法やアドミッション・ポリシー策定の出来不出来が、生き残りの鍵を握るからである。詰まるところ、各大学が実施する入試の特色およびイメージが、大学母体へのイメージを形

成する1つの要因と成り得るのである。

こうした中、ペーパーテストでは測れないとされる「人間性」、「意欲・関心」、「志望動機」などの重視を謳うアドミッション・ポリシーを打ち出す大学は多い。これらの特性を評価する方法は、各大学によって様々であるが、代表的な評価方法として、面接試験が挙げられる。国公立大学だけに限ってみても、72.3%の大学が実施していることから(文部科学省,2007)、多くの大学で面接試験が実施されているのが実情である。

しかしながら、面接試験は、その試験構造ゆえにペーパーテスト等と比較して具体的な評価基準が見えにくく、受験生を指導する側からみれば、対策および合否の予想が立てにくい。そのため、実際の受験生から得られた各大学の面接試験に関する情報が、進路指導の場では大いに活用されていることが考えられる。こうした受験生からの情報のフィードバックを前提としたとき、彼らがもた

らす情報そのものが、実際に受験した面接試験に対して抱いた印象の影響を受けていることは否定できない。例えば、ある大学の面接試験において、「適正に評価されなかった」など、悪い印象を多くの受験生に抱かせたとすれば、フィードバックされる情報はネガティブな内容になることが予想される。反対に、多くの受験生に良い印象を抱かせることができれば、ポジティブな情報としてフィードバックされ、以降の受験生に対する進路指導においてもプラスの影響を与えるかもしれない。つまり、受験生が抱く印象をある程度コントロールすることができれば、フィードバックされる情報に対して一定の影響力を与えることが考えられる。

そこで筆者らは、彼らが抱く印象を検討するために、実際に実施された面接試験において、受験生を対象にアンケート調査を実施し、彼らの印象を構成する要因とそのメカニズムを検討した(西郡,2009)。本稿では、同じデータを用いて主として選抜区分による印象の違いについて分析した結果を報告する。

2. 方法

2.1 調査概要

調査手続きの詳細については、西郡(2009)で示しているため、本稿では調査の概要のみを記述する。

面接試験を実施している複数の大学へ面接試験後のアンケート調査を依頼し、3つの大学から協力を得られた²⁾。対象学部は、各大学で異なり、文系と理系が混合しているものの相対的に理系学部が多い。面接の形態は、3大学とも複数の面接者に対して、被面接者1人という「個人面接」の形態であった。ただし、同一大学においてセンター試験が課

された選抜区分とセンター試験を課されない区分が混在するケースがあったため、分析に際してそれを分割し、便宜上「A大学」、「B大学」、「C大学」、「D大学」と表記とした³⁾。アンケートへの回答方法は、面接試験終了後という前提条件は同じであるが、その手続きは、「回答は回答者の自由意志に任せた郵送返却」、「休憩時間に希望者のみが回答する現地回収」、「大学独自のアンケートに付加した悉皆調査」と大学によって異なる。調査票は、無記名実施かつプライバシーを保護することを明記しており、個人属性に関しては、性別、現浪のみである。それ以外は、3セクションで構成されるが、本研究では、試験当日に実際に受けた面接試験について尋ねた「本日受けた面接試験に関して」という5段階評定形式(「そう思わない」<1点>、「あまりそう思わない」<2点>、「どちらとも言えない」<3点>、「少しそう思う」<4点>、「そう思う」<5点>)の部分と「面接試験に関する意見や感想」という自由記述部分を利用した。

全回答者は583名(男子:388名、女子:114名、無記名:81名)であった。現浪別では、現役が525名、浪人が45名、無記名が13名と回答者のほとんどが現役高校生である。大学別では、A大学が79名、B大学が46名、C大学が209名、D大学が249名であった。これらの回答から、「性別」、「現浪」の項目以外に欠損値のない551名の回答を分析対象とした。

2.2 分析方法

本研究では、西郡(2009)で示したモデルにおいて構成された4因子に注目し、これらの尺度得点の単純和における回答者の平均点について調査大学間で比

面接試験に対して受験生が抱く印象に関する検討

較した。各因子を構成する質問項目について表1に示す⁴⁾。

モデルの概要は、自己アピールや発言量および面接試験対策を活かすことにより、面接試験の過程を自分に有利にコントロールできたかという「過程コントロール感」⁵⁾と面接の雰囲気や面接者の対応、接し方等に関して肯定的に捉えたかという「社会的要因肯定的認知度」⁶⁾の2因子が、試験後の満足感や手応えを示す「試験後達成感」と面接試験への肯

定感を示す「面接試験肯定感」の2因子に対してどのような影響力を有しているかを検討したものである。

なお、機密性が重要視される条件下での調査であるがゆえに、調査手続きを一定に揃えることができなかった。そのため、アンケート調査実施手続きのばらつきが結果に影響した可能性も考慮に入れる必要があるが、分析結果を見る限りでは調査手続きが結果を左右した兆候は窺えなかった。

表1. 各因子構成する質問項目

| 因子名 | 因子を構成する質問項目 |
|-------------|--|
| 過程コントロール感 | <ul style="list-style-type: none"> ・準備してきた対策が十分いかせたと思う ・自分の長所を十分に面接者にアピールすることができたと思う ・アピールする時間は十分だったと思う |
| 社会的要因肯定的認知度 | <ul style="list-style-type: none"> ・面接者は自分の発言に関心を持ってくれたと思う ・嫌な気分になる質問があったと思う (逆転項目) ・自分の言いたいことが言える雰囲気だった |
| 試験後達成感 | <ul style="list-style-type: none"> ・本日の面接試験に手ごたえを感じている ・面接試験を終えて満足している |
| 面接試験肯定感 | <ul style="list-style-type: none"> ・客観的な評価基準に基づき評価されると期待できる ・可否の結果にかかわらず、結果に納得できると思う ・面接試験を受けることで入学後に勉強する意欲が増した ・本日の面接試験は貴重な体験だったと思う |

3. 結果

まず、面接試験の印象に影響を与える要因として構成された「過程コントロール感」、「社会的要因肯定的認知度」の2因子について、分散分析により平均値を比較したところ、2因子ともに主効果が確認された(表2)。Tukey法による多重比較の結果、「過程コントロール感」では、

B大学がA大学およびD大学よりも高いことが示された。一方、「社会的要因肯定的認知度」においては、A大学のみがその他の大学よりも低いことが示された。なお、性別を要因に含めて検討したが性別による影響は見られなかった。

表2. 「過程コントロール感」「社会的要因肯定的認知度」の尺度得点比較

| | A大学 (n=79) | B大学 (n=45) | C大学 (n=233) | D大学 (n=194) | 主効果 | 多重比較 |
|-----------|---------------|---------------|----------------|----------------|----------|-----------|
| | M(SD) | M(SD) | M(SD) | M(SD) | F値 | |
| 過程コントロール感 | 5.85(2.18) | 7.11(2.08) | 6.51(2.06) | 6.22(1.96) | 4.39** | A=D < B |
| 社会的要因肯定認知 | 10.97(2.78) | 12.51(2.29) | 12.79(2.05) | 12.83(8) | 14.97*** | A < B=C=D |

p < .01 *p < .001
多重比較の有意水準は5%、有意差があるものは不等号、ないものを(=)で表記

次に、面接試験の印象を構成する「試験後達成感」、「面接試験肯定感」の2因子について、分散分析により平均値を比較ところ、2因子ともに主効果が確認された(表3)。多重比較の結果、「試験後達成感」では、A大学がその他の大学に比べて相対的に低いことが示された。一方、

「面接試験肯定感」においては、C大学とD大学は、A大学とB大学と比較して高いことが示された。なお、性別を要因に含めて検討したが性別による影響は見られなかった。

表3. 「試験後達成感」「面接試験肯定感」の尺度得点比較

| | A大学 (n=79) | B大学 (n=45) | C大学 (n=233) | D大学 (n=194) | 主効果 | 多重比較 |
|---------|---------------|---------------|----------------|----------------|----------|-----------|
| | M(SD) | M(SD) | M(SD) | M(SD) | F値 | |
| 試験後達成感 | 5.46(2.32) | 6.78(2.16) | 6.54(2.36) | 6.64(2.19) | 5.88** | A < B=C=D |
| 面接試験肯定感 | 15.82(3.07) | 15.56(3.11) | 17.32(2.18) | 16.72(2.58) | 10.71*** | A=B < C=D |

** $p < .01$ *** $p < .001$
多重比較の有意水準は5%、有意差があるものは不等号、ないものを(=)で表記

また、面接試験が合否判定に対してどの程度のウェイトを占めているかという認識を尋ねた項目(「この面接試験の評価が合否に大きく影響すると思う」; 「ウェイト認識」と略記)と面接試験に向けた準備量を尋ねた項目(「面接試験の対策に多くの時間をさいてきた」; 「準備量認識」と略記)の各大学間の平均点を分散分析にて比較したところ、両項目において主効果が確認された(表4)。多重比較の結果、「ウェイト認識」におい

てA大学のみ相対的に高いことが示され、「準備量認識」においてもA大学が、B大学とD大学よりも高いことが確認された。なお、性別を要因に含めて検討したところ、「ウェイト認識」においては、性別の影響は確認されなかったが、「準備量認識」においては、主効果($F(7,472)=6.93, p<.01$)が確認され、女子の方が面接試験に対する準備量が多いことが示された。

表4. 面接試験の合否に対するウェイト認識とその準備量の大学別比較

| | A大学 (n=79) | B大学 (n=45) | C大学 (n=233) | D大学 (n=194) | 主効果 | 多重比較 |
|--------|---------------|---------------|----------------|----------------|----------|-----------|
| | M(SD) | M(SD) | M(SD) | M(SD) | F値 | |
| ウェイト認識 | 4.44(0.76) | 3.89(0.96) | 3.83(1.07) | 3.77(1.01) | 9.25*** | A > B=C=D |
| 準備量認識 | 3.43(1.38) | 2.80(1.38) | 3.02(1.24) | 2.31(1.21) | 18.49*** | A > B=D |

*** $p < .001$
多重比較の有意水準は5%、有意差があるものは不等号、ないものを(=)で表記

4. 考察

西郡(2009)のモデルでは、「社会的要因肯定的認知度」と「過程コントロール感」の相乗効果によって、「試験後達成

感」が高められていることから、「社会的要因肯定的認知度」と「過程コントロール感」の平均点が相対的に低いA大学において、「試験後達成感」が低くな

っていると解釈できる。一方、「面接試験肯定感」への影響は、「社会的要因肯定的認知度」が強い影響力をもっていることから、「社会的要因肯定的認知度」の平均点が相対的に低い A 大学において、「面接試験肯定感」が低くなっていると解釈できる。

もちろん、各大学によって面接試験の手続きは様々であり、一括りで議論することは出来ないが、受験生が抱く面接試験の印象という一元的な観点からみれば、大学間の様相は異なっている。特に、社会的要因に関する認識が持つ影響力は大きいことが窺える。さらに自由記述により受験生の印象を詳細にみると、A 大学における自由記述には、「全て言い終える前に、次の質問へ移ってしまい…(省略)」、「面接であそこまで、質問攻めにされると感じていませんでした」、「自分をアピールできる質問がもっとあって欲しかった」というような回答が見られ、受験生にとっては、自己アピール感を感じにくい質問の構成および内容が一部分にあったことが考えられる。また、面接者の被面接者への接し方や面接試験の雰囲気などを示す社会的要因に関する自由記述には、「面接官が疲れていたのが嫌な感じだった」、「足をだらんと投げ出されたり、よそ見をされたりしたのは少し不愉快でした」といった回答がみられ、こうした印象が社会的要因肯定的認知度の平均点を下げていると考えられる。

一方、面接試験の合否判定に対するウエイト認識および面接試験へ向けた準備量をみると A 大学が他大学よりも平均点が高い。つまり、A 大学では、多くの受験生が、面接試験の合否判定に対するウエイトを高く認識しているがために、面接試験に向けた十分な対策を講じ

てくる受験生が多いと解釈できる。この傾向を踏まえれば、A 大学では、面接試験に対する受験生の「思い」が相対的に強いために、合否という自己利益が直接的に絡むと感じる面接試験に対して敏感になり、厳しい見方をしていると言えるだろう。つまり、面接試験のウエイト認識や準備量によって、受験生が実際に受験した面接試験に抱く印象にも差が生じる可能性が示唆されるのである。

5. 結語

本研究では、幸いにも実際の受験生を対象に 3 つの大学において調査を実施することができた。個別大学単独で自大学の面接試験に対する受験生の感想や印象を調査し、そこから改善策を吟味する努力は言うまでもなく不可欠であるが、実施手続きも受験者層も様々である大学間の比較を行うことで新たに浮き彫りになる問題点もあるだろう。本研究の試みは、その一端もしくは可能性を示すことができたのではないかと考える。

今後、各大学が入試研究という共通の場で、出来る限りの範囲において協力しながら面接試験に関して議論できるような環境が整えば、大学入試における面接試験そのものの質の向上に繋がるだろう。本研究で得られた知見が今後の議論において一つの方向性を示すための基礎資料となれば幸いである。

謝辞

実際の面接試験という非常に難しい状況における調査、そして、データの大学間比較に関して許諾して頂いた 3 つの大学の皆様ならびに実際に回答して下さった受験生の皆様に対して心から御礼申し上げます。

注

- 1) 投稿時点での所属は「日本学術振興会特別研究員/東北大学大学院教育情報学教育部」。
- 2) 国立22大学, 私立3大学に調査を依頼したが, 調査の性質上, 多くの大学から協力を得ることは難しい。その詳細については, 倉元・西郡(2009)を参照されたい。
- 3) センター試験が課される場合には, センター試験の成績に合否が影響されるため, 選抜における面接の重要性が相対的に下がると考えられる。本研究においては, 分析結果を左右する大きな条件の相違である。ちなみに, センター試験が課されているのは「D大学」のみである。
- 4) 西郡(2009)では, 「構造的側面肯定認知」を含めた5因子でモデルを構成しているが, モデルにおける当該因子の影響力が小さいことから, 本研究では比較対象から外すことにした。また, 西郡(2009)においては, 「コントロール感」, 「社会的要因」という因子名を用いているが, 本研究では, 因子の意味をより明確化するために, 「過程コントロール感」と「社会的要因肯定的認知度」と表記した。
- 5) Thibaut & Walker(1975)の「コントロール理論」を踏まえたものであり, 面接試験における受験生の自己アピールや発言が, 少しでも合否決定の過程をコントロールしようとする心理的作用を意味する(西郡, 2007)。
- 6) 「社会的要因」(林, 2007)を踏まえたものであり, 面接試験の雰囲気や面接者の被面接者に対する接し方など両者間のコミュニケーションなどを通じて生じる要因に関しての肯定的認知を意味する(西郡, 2007)。

付記

本研究は, 平成20年度~21年度科学研究費補助金(特別研究員奨励費)の助成を受けて研究成果の一部である。

参考文献

- 林洋一郎(2007). 「社会的公正研究の展望: 4つのリサーチ・パースペクティブに注目して」『社会心理学研究』, 22, 305-330.
- 倉元直樹・西郡大(2009). 「大学入試研究者の育成 — 『学生による入試研究』というチャレンジ —」『大学入試研究ジャーナル』, 19 (印刷中).
- 文部科学省(2007). 平成19年度国公立大学入学者選抜の概要. <http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/18/08/06082405.htm>.
- 文部科学省(2008). 平成20年度学校基本調査速報. <http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/08072901/index.htm>
- 西郡大(2007). 「大学入試における面接試験に関する検討-公正研究からの展望-」『教育情報学研究. 東北大学大学院教育情報学紀要』5, 33-49.
- 西郡大(2009). 「受験者の心理的作用からみた面接試験の研究」『大学入試における社会的受容に関する研究-受験当事者の視点から-』博士学位論文.
- Thibaut, J., & Walker, L. (1975). *Procedural justice: A psychological analysis*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.